



校長室だより 7号

中 島 悟

【キャッチフレーズ】

未来に残そう 伝え築いた 振徳商業
目指せ 三種目 日本一 !

【5月月間目標】 『挨拶の習慣化を目指そう』

【生徒会活動紹介】

1 生徒会活動 旧生徒会顧問 星原良治 20周年記念誌より抜粋(原文)

1. はじめに

今日、一般的に管理教育下に慣らされてきた生徒達に、自らの手で、企画・立案・実行・そして総括するといった、いわゆる生徒による自治活動は困難であるといわれている。無関心、利己主義に合わせて絶望感等が少なからずある。想えば10数年前の生徒会活動に比べ、衰退している面は目につく。

しかし、「感動する心」はいつの時代も同じで、その「感動」を生徒も教師も求めていることは確かである。ここ数年、本校の生徒たちの学校行事への取り組む姿勢をみても、彼らの内に秘めたエネルギーはとてつもなく大きなものであり、彼らの求めるところの「感動」の2文字は、今も昔も全く変わりはないことを確信したところである。

本校も20周年というひとつの大きな節目を迎えた。これまでに毎年8名の総務委員を中心に様々な生徒会活動を展開してきた。今まで築きあげてきた活動全般の総括をするとともに生徒会活動の新たな見直しの時期にきているともいえる。これより、年間を通しての主な生徒会行事を述べ、今後の活動の方向について考察してみる。

2. 生徒会の主な取り組み

- (1) 対面式……生徒会行事の年度の初めは対面式に始まる。2・3年生と新入生の最初の出会いである。その出会いを大切にする意味でもこの対面式は重要である。入学式終了後すぐということもあって、いささか堅い雰囲気の中で行われることもあり、ムードづくりはなかなか困難であるが、ここ数年、新しい企画を取り入れ、終始和やかになりつつある。
- (2) 歓迎遠足……毎年、新入生も学校に慣れはじめた頃の4月下旬、大堂津の猪崎鼻に全学年、足を運んでいる。2・3年生によるクラスの出し物は、派手なメーキャップに派手な衣装と、毎年定着しつつある。今後検討すべき点もあるが、生徒たちにとっては、クラス紹介の場やストレス発散の場でもある。
- (3) クラスマッチ……毎期末に、年によっては多少の種目変更はあるが、球技を中心に行っている。企画運営には体育委員が中心となり、先生方のアドバイスのもと、細い時間設定など、綿密な計画が練られる。クラスが一体となり、全力でぶつかり合うプレーにグラウンドも体育館も応援の激しい歓声で大いにエキサイトする。
- (4) 文化祭……文化祭は10月下旬に開催している。1年生が合唱、2年生が展示、3年生が演劇と、各学年コンクール形式で行われているが、この行事は各クラスの取り組みの充実、内容の向上を図る意味でも効果を上げている。1988年10月、本校体育館は素晴らしい歓声と大きな拍手、そして感動の涙で第17回の文化祭は大成功のもとに幕を閉じた。手話を取り入れたり、ハッピーを用いた祭り風の合唱、夕鶴を見事に演じた3年生の演劇、戦争をテーマにした生徒自作の劇等、これまでのドタバタ劇に変わり、本校文化祭の今後の明るい方向を見ることができた。

(5) 体育大会……体育大会は、生徒会行事としての位置付けはなされていないが、生徒たちが主体的に取り組む本校を代表する行事で、どの学校にも自慢できる目玉行事である。入場行進の練習から集団演技指導まで、教師主導型からリーダーを中心とした生徒主導の取り組みとなった。大会は、3年生の就職試験の関係により、1988年（S63年）より9月下旬開催となったが、7月には団の編成が行われる。団長をはじめリーダーを選出するが、希望者は多く、生徒の参加意欲が伺える。「自分たちの力で成功させよう！」という意識が高いということもあって、毎年、大成功のうちに終わる。1987年（S62年）の大会では、大会当日雨で順延となった。次の日、前日からの雨の影響を受け、グラウンド使用不可と判断。しかし、生徒たちは、ある者は先生方と交渉、ある者はスポンジを持ってグラウンドの水抜きが始まった。その光景は今でも脳裏に強く焼きついている。結局、多目的体育館で行われたが、生徒も教師も心はひとつ、「感動」の一語に尽きた。

以上、大まかな代表的な行事についての概要であるが、どの行事をとっても、俗に言う「シラケ」のムードはなく、一生懸命に取り組んでいる。

【革靴要求運動】

この革靴要求運動の起こりは、1986年（S61年）、生徒総会に始まる。男子生徒の靴が1985年にそれまで指定してあった皮靴から白の運動靴に変わった。理由は、①男子生徒の中に踵を踏みつけたり、裸足で履く者が多い。②活動しやすく、値段も格安、ということからであった。しかし、男子生徒からの不満の声は強く、女子生徒を巻き込んだ革靴要求運動へと展開していったのである。度重なる総務委員会、代議員会では活発な意見が出され、革靴使用許可趣意書の原案が練られた。生徒側の要求の理由はこうである。①運動靴に変わった理由がはっきりしない。②卒業後、ビジネスマンとして革靴は必要不可欠。③制服とのバランスがとれない等々である。私たちが考える以上に、生徒は真剣であった。

話し合いの中では、ただ要求するばかりでなく、自らの行動を今一度正していこうという動きもあり、月一度の風紀検査では違反者“ゼロ”ということもあった。代議員会では、革靴の踵は決して踏まない、裸足で履かないということを全員一致で可決し、クラスの男子生徒一人ひとりにも確認をとった。案を練って2年目、原案を生指部へあげたが、生指部でも、このことについては何度も話し合いがもたれた。

生徒の今後の自治活動の引き金になれば……という含みもあり、最終的には可決、いよいよ職員会での審議ということになった。1988年の冬である。当然のことながら1回で終ることはなく、何度か会議がもたれたが、いろいろな意見がでる中で、やはり、生徒たち自らの手による自治活動を今後期待するということで、2年がかりの革靴の要求は認められたのである。その可決の報告を受けた時の生徒の喜びは（総務委員は特に）今でも忘れられない。総務委員を中心とし、代議委員会が組織的に動いた近年には見られない動きであった。

この革靴要求運動は、生徒のわがままも、いささかあったかもしれないが、彼らが代議員会という組織を通して学校に筋道をたてて要求していったということに、大きな意義があったのではないだろうか。1989年（平成元年）4月、真新しい革靴で新1年生が入学してきた。事情を知らない生徒に、生徒総務は絶やすことなく、先輩が築いたこの運動を語りついでいくことが今後の課題である。～（中略）～

本校は、幸いにも、生徒も教師も、その意味においては前向きである。これから30周年、50周年、100周年と迎えた時の生徒会活動が素晴らしいものになっていることを期待するとともに、新たな振徳の揺るがない基礎づくりに努めたい気持ちである。